

医芸歌壇



辿る道

青森 秋霧 朝光

生きてゆく己は独り辿る道夕べの雨のあたたかきかな
青雲を自在に飛べよ迷ひ来しトンボ窓より放ちてやりぬ
あじさるの葉裏に小さき蝸牛かくれるやうにおそれるやうに
耳なれぬ打楽器のやうな音響くH R I K 身を委ねおり
生きざまの拙きわれに似たる子ら牛歩の親子とともに進まん

ハッ場ダム(河原湯)

千葉 蒲谷 玲子

うちつれて湯治にゆきし河原湯の赤き鼻緒の下駄もなつかし
湯煙りにぬくき大湯のガラス戸にびっしりと蛾ははりつきて居ぬ
音曲は鳴り去人のかげも拙れおひわり飛びし湯の大広間
国のためふるさと捨てしひと悲しハッ場のニュース今日も虚ろに
ダムに沈む温泉と知り父と訪いし日も遠くなりたり父すでに無く

仲秋

東京 小松 安彦

蝉の声聞こえなくなり公園のをちこちに鳴くこぼろぎの声
サルビアとマリーゴールド咲く苑の草のあはひを飛ぶ蛸蝶
くれなゐと紺青の花朝顔は十月一日なほも咲き継ぐ
木星と十五夜の月流れゆく雲のあはひにはつか眺める
台風の近づきてゐる雨の夜に幽けく鳴けるこぼろぎの声

二渓園

神奈川 助川 信彦

生糸商亀善の家に婿入りし原富太郎巨富を集むる
母方の祖父に南画家白村あり文化財鑑識眼は血統もあるや
亀善の買入れ置きし三ツ谷に二渓翁独自の庭園造る
内苑には京鎌倉の建物を移築す臨春閣が著名なり
金毛窟は二渓自身の茶室にて数奇こらしたる一郭をなす

サンクトペテルブルク行

神奈川 武井 忠夫

ゾーテル大帝夏の宮殿

高みより見やるなぞえに噴水と黄金像の煌めける庭
金色こんじきの彫像あまた数多並び立ち噴水さわに噴き上がりたる
丘の上ゆ流れ活かせる噴水と金色の像数限りなし
青き壁間と白き柱の入り交いて姿清さやけき工カテリーナ宮殿
王宮の栄華偲はゆ工カテリーナの絢爛・豪華・壮麗の宮

秋

東京 初芝澄雄

秋海棠

神奈川 布施徳郎

青空にはるかに拝む富士の山初雪の峯雄々しく高し
マロニエのすくと立ちし木々見上げ花のバリをしばし偲ひぬ
紅葉なり秋ニレの木々縫いながら坂上駅に歩を進め行く
ユキ柳道端にあり六本木アラスカの旅思い歩けり
庭の奥古里の庭甲高くひぐらしの声秋告げて鳴き

家族待つ古いとベンチに並びつつ問はず語りに話弾みぬ
車椅子われ低ければ知り合ひと妻の会話に取り残されき
夕暮れて天文台に「銀河見た」と態巻を旅する吾子のメールは
日曜は笑点見つつ妻笑ふ笑へぬ吾に啼くよ日ぐらし
母愛でし秋海棠も咲かずなり離郷者われに時積りゆく

神鬼

茨城 羽生藤伍

北の都

東京 横田英夫

陸奥湾の碧きを見つつ日本の三大霊場恐れ山に来つ
津軽の地竜飛岬の高き生哀しい歌を終日唄う
男鹿の地に北緯四〇度線を踏み夜は神鬼（なまは）の怒号に怯ゆ
神鬼と握手せし少年がこれは人間の手だ叫べり
秋彼岸高速バスで羽後の国黄なる稲田の広さ果てなし

八日の大通り公園は常になく選挙間近の喧騒の中
枝越しにマイク握れる人の見ゆ舞台に踊る人形のこと
高く低く噴水は絶えず相を変えしぶき飛び散る風吹き来れば
喧騒を避けて降り行くコトヒト店屋音器など飾りてありぬ
ゆるゆると時は流るる古き良き日本残れり北の都に

誤植

東京 林 宏匡

待ち待ちし歌誌届けども寄稿せしわが名上下誤植されあり
訂正文の誤植訂正依頼文これこそ誤植なきを祈りつつ
百寿人四万を超す世なれども自殺者の数増えぬるはかなし
ジャイアンツ優勝セールの三越の門にかなしむライオンズ像
三越の門に伏せぬる獅子像を巨人の像に変へて相心し